
君と僕の方程式

涼野 詩羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と僕の方程式

【Nコード】

N9439L

【作者名】

涼野 詩羽

【あらすじ】

はじめまして!!

涼野 詩羽です

初めての小説の投稿で、ドキドキしちゃってますo(< > ;)
投稿頑張るので生暖かい目で見つめてあげて下さいな (・・・)

今回の小説は大好きなイナズマイレブンの夢小説です! (・・・)
駄文で申し訳ないのですが、楽しんで頂ければ泣き叫んで喜びます
!!

コメントなどを頂けると更新速度アップするかもです!!

はじめまして

君との時間…

あの日逢ったときから、この恋は始まっていたのかな？

沢山傷付けて、沢山傷付いて…。

それでも大切だと思えたこの時間は、きっと君のおかげ…

好きだと言ってくれた君へ。

私も…あなたが好きです…。

ねえ…？

そう言えば君は前みたいに笑ってくれるかな…？

* * * * *

「綾！！木野先輩が居ないんだけど…知らない…？」

「春奈、お姉ちゃんなら確か…アメリカから友達が来るらしくて、遅れるって！！」

ある少女たちの会話である。

春奈と呼ばれた青いボブ、そして赤淵眼鏡の少女は、綾、クセの付いた焦げ茶色の長い髪をした少女に話かけた。綾はそれに答え、にっこりと可愛らしく微笑んだ。

「綾…やっぱり、サッカー部のマネージャー、一緒にしようよ…！」

「うーん…でもあたし…鈍臭いから…」（苦笑）

少し興奮気味の春奈に苦笑しつつ、やんわりと断る。
が、何故か余計に喜ばれた。何で…？（いや、本当に何で…！？）

「それがいいのよ！！サッカー部の癒し系！！！！お兄ちゃんも喜ぶし！！！！」

「い、癒し系！？」

癒し系は春奈達が居ると思うんだけどなあ……。
それに何で鬼道さんが喜ぶの？

春奈が何を言っているのか分からず、首を傾げる。

そんな彼女に春菜はにこにこ笑っていた。（可愛いなあ……。）

「ね？入ろうよ綾！！お願い！！！！」

「うー… ……わかった…。」

「やったあ！！じゃあキャプテン達の所に行きましょう！！」

「ううっ！？春菜！ちよつと待つ…！！」

了承したらすぐさま腕を引かれ、サッカー部のいるグラウンドへと連れて行かれた。（それはもう…すごい速さで…。）

グラウンドに着いたは良いものの、殆ど引きずられる形だったあたしは、頭の中がぐわんぐわんと揺れている。

周りがまだよく把握出来ないが、何やらサッカー部で何かを囲む様に集まって居るようだった。

やっと意識がはつきりしてきた頃。

1番最初に目に入ってきた光景に驚いた。

「お…お姉、ちゃん…??！」

知らない男の子に抱き締められている姉、木野 秋の姿だった。

一目惚れって何ですか？

「お…お姉ちゃんを離して下さい！！」

秋に抱きついている男の子の所に行き、震える声で言った。
ぎゅっと両手を握り締め、男の子を精一杯に睨み付ける。

そんな彼女の願いが叶ったのかは謎だが、男の子は秋を離してこちらに視線を向けた。

一瞬、ドキリとした。

大きな瞳に長い睫毛。

日に焼けた肌。

茶色の柔らかそうな髪。

（はわわっ！！び、美少年だ！！！！）

彼への第一印象はそれだった。

「一之瀬君！！！！」

秋の声に肩が跳ねた。アメリカからの友達って……。

（こ、この人だったんだ！！）

そこで、あたしは急に血の気が引いた。

あれ…あたし……。

凄く失礼な事言っただけ……？？

抱きついたのは何年振りかに逢えた喜びからなら理解できる。アメリカ帰りならなおさらだ。スキンシップ。喜びの証。挨拶。
ぐるぐると言葉が頭の中で渦を巻いている。あ、謝らなくちゃっ！

!!!!

「あ、あのっ!!!!!!」一之瀬……さん?えと……あの……。」

オロオロしていると、ぎゅっと手を握られ、可愛らしい笑顔で見詰められた。

えと……………あれ……………?????

「秋の妹だよね??名前は??」

「え?あの…う?」

「俺は一之瀬 一哉です。君の名前を教えてください!」

「あ…綾…です…。」

あまりの眩しい笑顔に思わず乗せられてしまう。爽やかとは正にこの人のためにある言葉だと思う。

「突然ですが、一目惚れって…信じる?」

お姉ちゃん……あなたのお友達のせいで妹の頭の中はショート寸前です…。

* * * * *

一之瀬 side

「お…お姉ちゃんを離して下さい!!」

最初、震えた可愛らしい声をあげた少女に驚いた。ふんわりとしたくせつ毛に睨みつけているんだろうけど、恐さが微塵も感じられない潤んだ大きな瞳。

まるで、必死に威嚇する子猫のようで、素直に可愛いと思った。正直、愛おしいとも思った。それが彼女への第一印象だった。

「一之瀬君!!!!」

秋が俺の名を呼ぶ。

頭の中は女の子の事でいっぱいだったけど、取り敢えず、みんなに自己紹介をした。

ふと、女の子を見ると、俺と秋の事を理解したのか、オロオロし始めていた。（正にストライクゾーンだった。）

「あ、あのっ!!!!!!一之瀬…さん?えと…あの……。」

話しかけてきた彼女の手を笑顔で握る。（俺の手より小さくて柔らかかった!）

このままサヨナラ何て性に合わないし!

「秋の妹だよね??名前は??」

「え?あの…う?」

「俺は一之瀬 一哉です。君の名前を教えてください!」

「あ…綾…です…。」

綾、彼女は多分、流されやすいタイプなのだろう。そして押しに弱そうだ。

ここで彼女の事を好きだと、はっきり告げたなら……どんな表情をするのだろうか？

「突然ですが、一目惚れって…信じる？」

彼女は顔を赤くしている、が、あまり意図は掴めていないようで、首を傾げた。

正直、この時点でかなり周りからの視線が痛いのだが、この際無視する。

「俺、君に一目惚れしちゃったみたい！」

* * * * *

「突然ですが、一目惚れって…信じる？」

最初は良く分からなかった。

一目惚れ〓好き位かな？って曖昧な感じ。

只、それを何であたしに言うのか…チンプンカンプンで、あたしは首を傾げた。

そこで彼は最高の笑顔でこう言った。

「俺、君に一目惚れしちゃったみたい！」

頭の中が真っ白になった。

不意に顔に熱が集まっていく。多分、今のあたしは真っ赤だと思う。

あたしの頭の中には余計に渦が巻く。混乱と恥ずかしさが入り交じって余計に混乱を生み出す。

『はあああああ??!!?!?!?!?!』

今まで固まっていた（なかなか出番を出せなかった）叫んで肩がビクンと跳ねた。

「あ、あう…あの、あのっ…あたしっ!!!い、一之瀬さんの事良く知らないですし…。」

「好きな人…いたりする?」

「いつ、いませんが…あのっ…。」

断れば傷付けてしまうだろうか??

お姉ちゃんの友達だから悪い人では絶対じゃないと思う。だからと言って、あたしがこの人を好きだとは限らないし、好きになるかも分からない…。

「まあまあ…一之瀬、綾ちゃんも困ってるし、いきなり告白って…お前…。」

戸惑っているあたしに土門さんが助けに入ってくれた。（土門さんありがとうございます!）

「お兄ちゃん!!!このままじゃ綾が取られちゃうよ!!!」

「なっ!!!何を言ってるんだ春奈!」

「綾ちゃん、俺、綾ちゃんのこと好きだよ？時間とか、初めて遭っただとか、そんなの関係なしに…。」

俺は君が好きだよ？

優しく微笑む彼に胸が跳ねる。

「……でも、あたし…。」

「いきなりこんな事言われて混乱してるんだよね…？」

その言葉に、コクリと頷く。

「そっか、そうだね…。いきなりごめんね？聞いてくれてありがとう。」

につこりと微笑む彼に泣きそうになった。

初対面だけど、好きだと言ってくれた。

優しい人…なのに…こんな簡単に振って良いのだろうか…？

そう考えた時、あたしの中に一つ、決心が生まれていた。

「あのっ！—之瀬さん！！」

「？綾、ちゃん…？」

「あたしに…あたしに時間を下さい！！あなたの事、きちんと知りたいから…時間を下さい！！」

貴方のことを…知る時間を…あたしに下さい……！！

そう言うと、彼はきれいに笑ってくれた。
そこでキュンと胸が鳴った気がした。

あなたの力

お姉ちゃんに聞くと、一之瀬さんは凄くサッカーが上手らしい。円堂さんも、豪炎寺さんまで言っていた。

ベンチに座って、春奈とみんなを見詰める。少し離れた所で、お姉ちゃんと土門さん、そして一之瀬さんで楽しそうに会話をしていた。それを横目で眺めていると、鬼道さんがこちらを見ていたので、にっこりと笑った。

（もの凄い速さで反らされた。）

「春奈、あたし…鬼道さんに嫌われてる？」

「ふふっ！大丈夫！！あれは照れ隠しだから！」

「照れ隠しって…」

鬼道さんはそんなキャラでは無い気が…

苦笑しながらフィールドへとまた視線を移すと円堂さんが一之瀬さんをサッカーに誘っていた。一之瀬は土門と共にフィールドに向かう。その途中に一之瀬さんが振り返ってあたしを見た。

「綾ちゃん！！見ててね！！」

キラキラした笑顔でそう言う。

あたしは只々頷いた。

* * * * *

「凄い…。」

一之瀬さんはお姉ちゃんが言った通り、かなりサッカーが上手かった。

どんどんみんなを抜いていく。

「あ…。」

鬼道さんと当たった。

鬼道さんは雷門で1番のMFだ。天才MFの異名を持つ。

一之瀬さんはヒールリフトで後方からボールを上げる。鬼道さんはそれを読んでいたのかボールへと向かい跳んだ。

が、ボールにスピンを掛けていて不規則に落ちていくボールは鬼道が触れる事はなく、一之瀬の元へと戻る。

そして再び円堂の待つゴールへと走り出す。鬼道さんはそれを追いかけて行った。

「一之瀬さんもお兄ちゃんも…修羅場ですね！」

「修羅場…？何で…？」

「あはは…。」

「お姉ちゃんも何で笑うの…？」

よく分からない2人の言葉に首を傾げた。

羽ばたけペガサス1

あれから何時間たっただろう？

一之瀬さんが友達になった記念に”トライペガサス”と言う技を円堂さんと土門さん、一之瀬さんの3人でやろうと言ったのだ。が、さつきから失敗続きで3人ともボロボロだった。

「何であんなになるまで…。」

「ふふっ！一之瀬君、諦め悪いから。円堂君と一緒に！」

「何か、似てますね！あの2人！外見は全然ちがうのに！」

「円堂さんに…似てる。」

そう言われて見るとそうかもしれない。
諦めが悪くって、真っ直ぐで…。

「サッカーが大好きで…。」

「綾??」

「あたし、ドリンク渡してくる!!」

立ち上がり、ドリンクを持って3人の元へ駆けっていく。

「一之瀬さんに惹かれ始めたって事でしょうか…あれ…。」

「あはは… とうだろ…。」

後ろでこんな会話が あったなんて、あたしは知らない。

* * * * *

「先輩!!」

「綾!! どうしたんだ?」

「どうしたんだ? じゃないです! 少しは休憩して下さい!!」

ドリンクを渡しながらそう言つと土門さんが相槌を打つた。

「綾ちゃん言い事言つた!!—之瀬も円堂も、少し休もうぜ?」

「土門は諦め早すぎ!!」

「土門さん、休憩は兎も角、サボりは駄目ですよ?」

「サボり!? 土門!! サボりは駄目だぞ?!」

「はあ… 分かりましたよ!。ドリンクサンキューな綾ちゃん!!」

何だかんだ言つて、キチンとしてくれる土門さんは素敵だと思う。

「頑張つて下さいね? (にっこり)」

「おう!! 絶対完成させるぜ!」

円堂さんが笑顔で言った。

土門さんは”綾ちゃんの応援で一年は頑張れる!!”と言っていた。
(冗談が凄い。)

一之瀬さんは何も言わずに顔を両手で押さえて、俯いている。(女
々しい…。)

「あ、の…一之瀬さん…??」

「綾ちゃん…今の、ストライクゾーンだった…。」

「え??あの…。」

「一之瀬も頑張れるってさ!!俺たちまた練習するから、綾ちゃん、
また後で話そう!」

「???はい…。」

きょんとしてあたしはベンチへと戻った。

* * * * *

一之瀬 side

「土門、ヤバい。今の笑顔はクリーンヒットだった。綾ちゃん可愛い!」

「一之瀬、ニヤニヤしてて気持ち悪いぞ?」

「だから顔隠したんだろ？」

「…ソーデスカ…。」

今俺の顔がニヤケてる事なんて自分が1番分かっている。
あの笑顔は本当にヤバかった。

あの応援に俺の名前付きだったら多分、逝ける気がする。
(真剣に。)

「さて、練習しようか！！円堂！！土門！！」

「「おうっ！！」」

再び、俺たちは練習を始めた。

ベンチの所でジッと俺たちを真剣に見ているのが分かる。

そんな視線を浴びつつ、技を完成させるため日が暮れるまで練習した。

「あー！！結局出来なかったなあ…トライペガサス…。」

円堂の家で御飯をご馳走して貰える事になって、練習の後、サッカー部(ほぼ全員)で円堂の家に向かった。

その途中、他愛もない話をする。

「でも、確実に完成に近付いてるのは確かだよ…？明日の夕方頃の便に乗るから…。」

そこでハッと気づいた。

そつだ…俺は、明日アメリカに帰るんだ…。綾ちゃんに…逢えなく

なる…。

「一之瀬？」

「あ、まだ時間がある！明日完成させよう！」

「ああ！」

明日までに…。

VSおにぎり事件

部活が終わって、あたし達マネージャーはタオルやドリンク、部室の片付けをしていた。みんなは円堂さんの家に行くらしい。他愛もない会話をしながら片付けを終え、ジャージから制服に着替える。

「綾、あたし円堂君の家によって行くけど…一緒に来る？」

「行く！！一人で帰るの恐いから…」

「そっか…ねえ…綾、綾はもう、あの事については平気なの？」

“あの事”…その言葉にビクリと肩を上げる。微かだが、手が震えるのが分かった。

「綾は…？」

「大丈夫だよお姉ちゃん！！サッカー部の人達はそんな人じゃないでしょ？普通に話せるし、触れる事も…出来るから。」

震える手に力を入れ、拳を作った。

あたしはお姉ちゃんに笑顔向け、「早く行こう！」と急かしたてた。

お姉ちゃんは苦笑していた。

多分、あたしが笑顔を作ってる事はバレバレだろう。そんなあたしの中では“あの事”がぐるぐるとリピートされ続けていた。

* * * *

円堂さんの家に着くと、靴の数に驚いた。

一体何即あるのだろうか？ 大ききこそ様々だが、足の踏み場が無いほどにスニーカーで溢れている。

啞然していると円堂さんのお母さん。つまりは、おばさんから声を掛けられ料理の手伝いをする事になった。

「凄く賑やかですね。」

呆けながら言うと、くすくすとおばさんに笑われた。

「一之瀬君の話が聞きたいって集まって来ちゃって！！だから秋ちゃん綾ちゃんが来てくれて助かったわ！！」

嬉しそうなおばさんを見て、あたしたちは顔を見合わせて笑った。

「本当、2人とも手際が良いわね！どっちか守の嫁に来ない？」

「そ、そんなっ！！よ、よよ、嫁って！！／／／」

「お姉ちゃん、動揺し過ぎだよ」

そんな姿をあたしは笑っていた。

* * * *

「「みんなー御飯できたよー！！！！」」

あたしとお姉ちゃんの声が響く。

それにみんなが急いで来るのが分かった。

「木野！！綾まで…来てたのか！？」

「だ、駄目、でしたか…？」

「否、すつげー嬉しいよ！！」

につこりと笑う円堂さんにあたしも微笑んだ。お姉ちゃんが「早く行かないと円堂君の分、無くなるわよ？」と笑いながら言うと、円堂さんは急いでみんなの所に行った。

「綾ちゃん！！」

「一之瀬さん！どうしましたか？」

「料理、スツゴい美味しいよ！！！！」

爽やか笑顔が輝いている（眩しい！）

それに笑みを浮かべると、何故か部屋が静かになった。（あれ？？あたし何かしたかなあ…？）その沈黙を破ったのは松野さんだった。

「綾、僕と結婚しようか！！」（につこり）

「……………へ……………？」

『はあ！？！？』

「冗談だよー…八割本気だけど。」

「殆ど本気じゃねーか!!」

松野さんに半田さんが突っ込みを入れる。

松野さんの冗談は時折本気に聞こえて困る。あたしは苦笑しながら、積み重ねられたお握りを手にとって一口食べた。

「あ、梅干しだ…。」

ぽつりと呟く。

どうしよう…あたし梅干し苦手なんだよね……。すっぱいのと微妙な塩加減が…

梅干しお握りと密かな格闘。

ジツと梅干しを見つめるがそこから梅干しの姿は消えない。（当たり前だけど…。）

仕方ないからお姉ちゃんに食べて貰おうとした時に、風丸さんに呼び止められた。

「食べないのか？そのお握り。」

「あ、はい。あたし、梅干し苦手ですけど…梅干しお握り当てちゃって…（苦笑）」

「ふーん…。」

ジツと風丸さんがあたしの持っているお握りを見つめる。あたしはそれに首を傾げた。

「風丸さん…？」

「なあ、そのお握り…。俺が食べてもいいか…？」

吃驚したけど、梅干し好きなんだ！という解釈。それなら好きな人に食べてもらった方が良さだろう。（梅干しお握りさんも喜ぶはずだ！）

風丸さんの言葉に頷いて、「食べかけですけど…。」と風丸さんに差し出す。

「ありがとう（にこっ）」

そう言うと、風丸はそのままそれを食べた。大事な事なのでもう一度言います。

風丸さんはそのまま、お握りを受け取らずに、あたしが持ったままのお握りを、そのまま食べた。（きちんと指に付いたご飯まで食べられました。犬に指を舐められる感じ。）

「か、かかつ、風丸、さんっ?!！」

「ん？」

「お、お行儀悪いです！」

「綾！突っ込む所間違ってるぞ?!！」

半田さんがあたしに突っ込みを入れた。半田さんは突っ込むのが好きな様です。

「美味しかったよ、ありがとう綾。」

「いえ、こちらこそ!」

彼の笑顔に意味があることをまだあたしは知らない。

* * * * *

「うーっ!! 楽しかったね! お姉ちゃん!」

「そうね! 賑やかだったなあ……。」

にこにこ笑いながら話す、あたしとお姉ちゃん。何でか、一之瀬さんと風丸さんが騒いでいたけど……理由はよく分からない。それにしても……。

「梅干しお握り食べた時驚いたなあ……。」

「えっ!?! 綾、梅干し食べれたっけ?」

「ううん? 一口食べて、後風丸さんが食べてくれたよ?」

笑顔で言ったら、お姉ちゃんは固まってしまった。あれれ? あたし変なこと言ったかなあ……? ?

「…………綾……。」

「なあに?」

「風丸君、お握り食べた時の様子はとうだった……？」

「？別に普通かなあ……？あ、指舐められたけど。犬みたいだった！」

「綾、一時、風丸君に近づいたら駄目よ？」

「何で？」

「何でも！！（可愛い妹を毒牙にさせるもんですか！）」

「……？」

今日の格言>>姉の心妹知らず。<<以上！

* * * * *

一之瀬 side

「風丸、君、何してくれた……？（黒笑）」

「一之瀬、こう言うのは早い者勝ちなんだぞ？常識だろ？（黒笑）」

只今風丸と格闘中。

内容は梅干しお握りについて（ 周りからして間抜けな会話。 ）
取り敢えず、綾に対してライバルが多い事はよく分かった。
今のは……3人かな？

「一之瀬、早くアメリカに帰ったらどうだ？」

「帰ったとしても、綾ちゃんは渡すつもりないよ?」

「お前のじゃないだろ?」

「いずれなるんだよ。」

しばしの沈黙。

「一之瀬、お前には負けないからな!!」

「俺も同じ!!」

「絶対負けない。」

その言葉を最後に、俺と風丸は別れる。
明日が楽しみだ。

そう思うと自然と笑みをこぼしていた。

* * * * *

「えっ? 一之瀬さん…今日アメリカに帰るんですか!?!」

あたしは驚きの声を上げた。

一之瀬さんは言っでなかったっけ?と言う感じでキョトンとしている。
(そんな話聞いてません!)

「みんな知ってるのに…何であたしには言ってくれなかったんです

か！」

「あはは… まさか、ここまで怒るなんて…」

「怒ります！！…いきなりサヨナラなんて…あんまりじゃないですか…。」

まだ一之瀬さんについて知らない事が沢山ある。
少し、もう少し…あたしに時間を下さい…。

V Sおにぎり事件（後書き）

か、風丸さんを大胆にしすぎましたああああ！！！！！！！！（泣）
恥ずかしいです…。

じ、次回…頑張れる…かなあ…？

羽ばたけペガサス2

あれから、今日こそ完成させる！！と、練習を始めた。あたしは少し拗ねつつも、ジツとその光景を見つめる。昨日同様、ボロボロになっっていく。正直痛々しい。

もう少しと言う所で失敗して、吹き荒れる風に飛ばされる。

「もう少しなのに！！」

「だよね！！」

春奈が言っで、あたしが相槌をうつ。

一方、お姉ちゃんは何か考え込んでいる。一時して、何かに気づいたのか、円堂さん達の元へ歩みを進めた。

「お姉ちゃん？！」

「木野先輩！！危ないですよ？！」

慌てて止めようとするあたし達にお姉ちゃんはにっこりと笑い掛けた。

「思い出したの！ペガサスが飛び立つには…乙女の祈りが必要だって事に！！」

そう言うとお姉ちゃんは3人の元へとまた歩み始める。あたしはそれに付いて行った。

（もし、もしも危険な事をしようとしているのなら…お姉ちゃんを

止めないと！！）

案の定、お姉ちゃんは自分がポイントに立つと言い始めた。勿論、あたしも円堂さんも止めに入る。が、聞く耳を持たずに、最終的には押し黙らせた。

「なら、あたしが代わりにやる！！」

納得の言っていないあたしがそう言つと、また反対し始める。

「綾、危険だから此処はあたしに任せて？」

お姉ちゃんが優しく言う。

が、あたしは首を縦に振ろうとはしなかった。それどころか、横に振り、否定の意を伝え、必死に反抗する。

「嫌！何で？お姉ちゃんは良いのに何であたしは駄目なの！？」

「綾、君は…。」

「傷ついて欲しくない…ですか？なら何でお姉ちゃんは止めてくれないんですか！」

一之瀬さんの言葉を遮って、思いつ切り睨み付けた。ボロボロと自然と溢れてくる涙をそのままに、眉をつり上げて睨み付けた。

土門さんが一之瀬さんを困った様に見つめる。その姿に一之瀬さんは溜め息を漏らした。

「分かった。そのかわり…。」

”俺達を、俺を信じて。”

あたしは静かに頷いた。

…チャンスは一度きりだ…。

* * * * *

「本当に大丈夫なのか？」

「円堂達の事だから絶対完成させるさ！」

豪炎寺の言葉に半田が答える。

綾がポイントに立ってから、他のメンバーはそれを見つめてそんな会話をしていた。

「綾に何かあったら、一之瀬を殺る（黒笑）」

「風丸、俺も手伝うぞ？」

「ああ、助かるよ鬼道。」

「こんな時だけ意気投合するな。」

「シスコンは黙つとけ。」

「…………。」 無言でボール用意。

「待て、豪炎寺…ちょっと待て。」

半田が顔を青くして止めに入る。

「爆熱スト「使うなあああああ！！！！」」

そんな姿をマックスがお腹を抱えて笑っている。シリアスどこ行っ
たとか気にしない

因みに、作者は鬼道さんもシスコンだとおm（強制終了）

…

…

「GO！！」

一之瀬の掛け声で3人が一斉に走り出す。

あたしは迫って来るそれに静かに目を閉じた。

（大丈夫…。）

何度も心の中でそう囁く。

3人なら…成功させてくれる！

次の瞬間、綺麗に3人は交差して、そのまま、天馬のように空を掛
けていった。そして勢いをつけたままボールを思いっ切り蹴る
あたしはそれに振り返って空を見上げる。

「飛んだ…。」

成功して、空を駆ける青いペガサス。

見取れていると、技でできた気流が勢い良く吹いてきて後ろに倒れ掛けた。

が、倒れる事はなく、気付けば誰かに支えられていた。

「大丈夫か…？」

低く響く声にゾクリと肩が震えた。

カタカタと震える手を握り、声の主から急いで離れる。

「あ、ありがとうございます…豪炎寺さん。」

「綾…！」

お姉ちゃんがあたしへと駆け寄って来る。

豪炎寺さんも少しおかしそうにあたしを見ていた。震えは、まだ止むことはなかった。

* * * * *

震えの事は豪炎寺さんには何とか言って誤魔化した。…分かっている…豪炎寺さんやみんなが”アイツ”と同じじゃないことくらい…。

「綾、やっぱりあなたまだ…。」

「大丈夫…あたしは、大丈夫だよ？お姉ちゃん…。」

力なく笑うと、お姉ちゃんは只々抱き締めてくれた。温かいお姉ちゃんの体温に震えも収まる。

「お姉ちゃん、ありがとう…。」

「うん、無理、しないでね…?」

「うんっ!」

にっこりと笑うとお姉ちゃんは安心したのか頭を撫でてくれた。お姉ちゃんに頭を撫でられるのは好きだ。優しいし、傍にお姉ちゃんが居るんだって、安心するから。

「綾ーっ!! 成功、したよ!」

「一之瀬さん!!」

一之瀬さんは嬉しそうに笑った。あたしも吊られて微笑んでしまう。

「カッコ良かったです。一之瀬さん!!」

「…本当に…??」

「はい!! 本当です!」

意気込んで言うと一之瀬さんは嬉しそうにガッツポーズをとっていた。

「うふふっ!! これで心置きなく、アメリカに帰れるわね!」

秋の言葉に静かになる。そう言えば…今日一之瀬さんは…。

「アメリカに帰らないよ?」…へ?」

「アメリカには帰らないよ?綾ちゃんと一緒に居たいし、円堂達とサッカーしてみたくなっちゃった!てことでよろしくね!」

良いんでしょうか、これで…

呼び方

結局、一之瀬さんは雷門に転入して来たらしい。確か土門さんと同じクラスだったと思う。勿論サッカー部に入るとの事。

「雷門、最近転入生多いですね。」

「だね。」

机に突っ伏してのんきな会話をするあたしと春奈。

「綾ちゃん!!」

…一之瀬さんが遊びに来ました。周りの女子が黄色い声を上げる。
(一之瀬さんイケメンだもんなあ…)。そんな一之瀬さんは騒いでいる女子に目もくれずに此方に寄って来る。

「学校、案内してくれないかな?」

「あの…一之瀬さん、此処まで来れたなら道…分かりますよね…?」

「此処までは土門に教えて貰ったんだ!」

じゃあそのまま土門さんに教えて貰わなかったのだろ? あたしはキョトンと首を傾げた。その意図を理解したのか、にっこりと笑って「言い方変えるね。」と言ったので、あたしはそれに頷いた。

「俺と校内デートしませんか?」

「ふえっ!?!」

「ひゃー！一之瀬さん、大胆ですね！」

あ、あたしは大胆過ぎて付いて行けません…（泣）みんなこっち見てるし…。

「…少し、なら…。」

「きゃー！綾、照れて可愛いVv」

春奈、恥ずかしいから止めて…

断らなかった、と言うより、断れなかったに等しい。だって…一之瀬さんがあまりにも期待の眼差しで見てくるから…。

（はあ…）

あたしは心の中で1つため息を吐いた。

* * * * *

「此处が第2音楽室です。比較的、二年生と三年生はこっちを使いますね。」

説明しながら廊下を歩いて行く。

一之瀬さんはあたしの横をあたしのペースに合わせて着いて来る。

「…と、大体説明は終わりましたけど…。」

”何か分からないことがありますか？”と付け足し、首を傾げた。一之瀬さんはそれに”うーん…”と唸りながら考え始める。一時する

と何かを思い出したように、” あっ！” と声を上げた。

「学校の事は分かったんだけどね？俺…」

” 綾ちゃんの事をもっと知りたいな！”

につこりと笑顔で言う彼に、あたしは顔を真っ赤にして「ふえっ？！／＼／」と奇声を上げる（恥ずかしいよぉ～！！／＼／）それに彼はクスクスと笑っていた。

「綾ちゃん、俺に君の事…教えて…？」

首を傾げながら聞いてくる彼に、あたしは何を言えばいいのか分からずに視線をうつろちよろさせて指を絡ませたり、手混ぜをしながら、俯きがちにチラリと一之瀬さんを見た。

「クスっ、じゃあ、俺から質問するね？」

「ううゝ スイマセン…」

「いえいえ！その代わり、質問には全部答えてね？」

「えっ?!」

俯いていた顔を勢い良く上げ、彼の表情を伺うと、相変わらず綺麗に爽やかな笑みを浮かべていた。

「そんな!!」「はい、まず綾ちゃん、好きな食べ物は何ですか？」
「ううゝ…お、オムライス…です……。」

「可愛いね！」「かわっ！！？／＼／」次！誕生日はいつですか？」

「……9月9日……です……。」

もう何も聞いてくれないみたいです…（泣）

渋々質問に答えるあたし。（一之瀬さん、満足気）その後、苦手なものとか、今欲しい物とか色々聞かれた。

「じゃあ最後に、綾ちゃん、君の事、綾って呼んでも良い？」

簡単な質問だった。あたしは只、笑顔で答えた。

「勿論です！一之瀬さん！」

一之瀬さんも笑顔をくれたのが、嬉しく感じた。

悩み事

「あんたさあ…最近調子乗ってない？」

ある日の校舎裏、あたしは先輩達に呼び出され、人気のない此処へと連れてこられていた。

「あの…あたし…。」

”何かしましたか…？”
言おうとして、言葉を止めた。

先輩達は怒っている。覚えは無いが、もしかしたら知らないうちに傷付けていたのかもしれない…。考えているうちにも、ひたすら愚痴を言われ続け、あたしは只々謝る事しか出来なかった。

「全く…何でこんな子に惹かれるの?! どうして…あたしを見てくれないの…？」

「……え…？」

「あなたが居なければ…っ!」

ぱっと手を振りかざす。

叩かれると思い、反射的に身を縮め、瞳をきつく閉じて、来るであろう頬の痛みを待った。が、何時までたっても痛みは来ない。

チラリと片目で盗み見れば目に入ってきたのは空色をした長い髪だった。

「風丸、さん…。」

風丸さんだった。眩きが聞こえたのか、彼は振り返って優しく微笑んだ。

「大丈夫か？綾。」

「大丈夫、です…。」

そっか…。と頭をくしゃくしゃと撫でられてた。一時して風丸さんは先輩達に目をやった。その瞳は優しい物ではなくとても鋭く冷たいもの。

「先輩、綾を傷付けて、それで鬼道達が自分達を見てくれるとも思ってるんですか？」

馬鹿気ている。と風丸さんは目を伏せた。

先輩達は酷く傷付いたような表情を見せた。”あ…。”心の中で呟いた。あたしはぎゅっと風丸さんの腕を握って、彼に睨むのを止めて貰った。

「風丸さん、これ以上、先輩達、傷付けしないで…？」

止めたのは、先輩達が風丸さんの事も好きだから。だから仲の良いあたしに嫉妬したのだろう。

「風丸さん、謝って下さい。先輩達は何も悪くないです。只、嫉妬しちゃっただけ。」

ね？と笑い掛けると彼は戸惑い勝ちに頭を下げた。”男の人を好き

になる”あたしはいつ、それが出来るように成るのだろう…？

あたしは1人、自問自答していた…。

告白と困惑と

「綾、あの時、何で止めたんだ？」

先輩達との事で風丸さんが聞いてくる。あたしはそれに苦笑して、口を開いた。

「だって、好きな人に嫌われるのは辛いじゃないですか！」

につこりと笑えば風丸さんはキョトンとした後に苦笑し「確かにな…。」と言っていた。

「それだけ自分の事も敏感だと良いのにな…。(ぼそっ)」

「？何か言いましたか…??」

「否、俺も一之瀬みたいに告白しようかと思っ…てな…。」

「風丸さん、好きな人いるんですか?! 誰ですか? お姉ちゃん? 春奈? それとも、「綾だよ」…え…?」

「俺が好きなのは、お前だ、綾。」

風が、止んだ気がした…。

* * * * *

「俺が好きなのは、お前だ、綾。」

思考が停止した。

冗談だと思い、彼の表情を伺うが風丸さんは只、真剣にあたしを見詰めるだけで…。どうして良いのか分からずにあたしはその場から逃げたした。

「はあ…はあ…」

走って走って、気が付けばサッカー部の部室の前に来ていた。

ポロリと、温かい物が頬を伝う。それが涙だと知って、止めようとした。

が、止まらなかった。

止めようと思えば思う程に溢れ出してくるソレは、地面に次々と黒いシミを生み出していく。

「ごめ、なさい。」

泣きながら訳も分からず呟いた言葉。

何で自分が泣いているのか…。それすらも分からない…。決して風丸さんが嫌いな訳じゃない、むしろその逆。かと言ってそれが恋愛感情なのか、よく分からない。

”どうしよう…”。考えた。

”何時も通りに” 何時も通りつてどんなだっけ…?

” 傷付けた…?” きつと傷付けた。

分からないわからないワカラナイ…。

頭の中がぐるぐる回る。

あたしは、どうすればいいんだろう…?

見上げた空は何も応えてはくれなかった。

「…綾…？」

「！ご、うえん、じ…さん。」

「どうし…っ！泣いているのか…？」

手を延ばしてくる彼に少し、肩を揺らした。それに気付いたのか「大丈夫だ」と一言言っであたしの頭の上に手を乗せた。
ふと…その瞬間にさっきの風丸さんを思い出し、少し治まっていた涙がまた溢れる。

「恐いか…？俺が…。」

「違っ！「あの時も…。」…え…？」

「俺が抱き留めた時も震えていた。」

”何でなんだ？”とでも言うように、彼は悲しそうにあたしを見た。があたしはそれに応える事は出来なかった。只、首を横に振って豪炎寺さんに訴える。

「はあ…じゃあ、何で泣いていたんだ？」

「…その…風丸さんに、告白され、て…どうすれば、いいか、分かんなくなっ…。」

「一之瀬とはまた状況が違うからな…。」

それにあたしは静かに頷いた。

一之瀬はあつたばかりだからそこまで関係が崩れるとか考え無くてもよかった。

が、風丸さんの時はまた違う。

風丸さんは仲良くなって、結構時間がたつ。だから、今までの関係が崩れるのが怖い。

「どうすれば良いんでしょうか…。」

「自分で答えを出せ。」

「え?!」

「お前は、どうしたいんだ?」

「あたし、は…。」

「本当は、答えが出てるんだろう?それを風丸にぶつければいい。アイツなら…どんな答えでも受け止める。絶対にな…。」

「あたしの…考え…。」

あたしは、豪炎寺さんにお礼を言って走り出した。
目指すのは、風丸さんの所…。

* * * * *

風丸side

「俺が好きなのは、お前だ、綾。」

勢いで告白して後悔した。

想いを告げた綾は俺の好きな笑顔ではなく、酷く困った表情をしたからだ。

当たり前だろう…。

一之瀬の事で、既に悩んで居るのに俺まで……。結果的に、彼女は逃げてしまった。

「ははは…考えれば分かるのに…馬鹿だな、俺は…。」

乾いた笑みを浮かべる。

想いなんて…好きだなんて、言わなきゃ良かった…。
彼女の、綾の事を…。

「好きに、なるんじゃないかった…。」

正直、泣きそうだった。

好きになるんじゃないかった何て…本心なんかじゃない。
彼女を好きだと言う気持ちは、こんなヤワなものなんかじゃない。

ふと、足音が近づいて来るのが分かった。

「風丸さん!!!!!!」

「!?!あ、や…?」

足音の主は綾だった。

走って来たのか、息を切らせていた。

「良かった…まだ、居て…。」

「綾…俺は「ごめんなさい。」…え…?」

「傷付けて…ごめんなさい…。あたし…頭の中が混乱して…どうすれば良いか分かんなくなつて…あたし、あたし…。」

「綾…。」

「豪炎寺さんに言われたんです。風丸さんなら、あたしの想い…きちんと受け止めてくれるって！ちゃんと応えてくれるって！！だから、だからあたしも！風丸さんの想いにきちんと応えたい！だから…！！」「もう良いよ…。」え?」

「俺は、待つから。綾の答えがキチンと出るまで…。」

「風丸さ「だから。」…?」

「これから俺は毎日お前に想いを告げ続ける！覚悟しとけよ？綾！」

「え…?え、ええ つ?!!!」

やっぱり俺は君を好きになつて良かった。

この日、改めて俺は綾への想いを再確認した……。

積極的

最近、風丸さんはかなり積極的です。
ある朝

「綾！好きだ！！」

「ひゃわああ！！か、風丸さん？！！」

ある休み時間

「綾！！校内デートしないか？」

「えう…遠慮、します…」

ある放課後

「綾！今日部活無いよな？一緒に帰らないか？」

「あうう……／＼／＼」

……積極的です……。 （遠目）

「最近の風丸さん、積極的ですね……。 」

「うん……。 は、恥ずかしい……。 」

「所構わずアプローチだもんね……。 」

春奈が苦笑した。 あたしは机に力無く平伏した。 あたしは多分茹で

蛸状態だと思う。

「綾っ！！」

「綾、一之瀬さん来たよ？」

「返事が無い、只の屍のようだ」

「「綾が壊れたっ！！」」

が、一之瀬は諦めずに話し掛けて来るので渋々顔を上げた。（まだ熱いよ…）

「綾、顔赤いね…。」

「うう…赤くもなりますよ…。」

「……何か、風丸に嫉妬するなあ…。」

「う…？」

「だって、綾がこんな風になるって、意識されてるって事でしょ？」

確かに、何て春奈が頷く。

…い、しき…？

「ええっ！！？なっ無いですっ！！／／／」

「あ、赤くなった。俺も風丸見習おうかなあ…。」

「…お兄ちゃんにも言って来ます!!」

「ええ つ?! つて、春奈! 何で鬼道さんなの?!」

大変な日々はまだまだ続くのです。

重大なこと

「ど、どうしよう…。」

今日和、木野綾です！あたしは今、大変な事に気付いてしまったのです…！

お姉ちゃんに聞いてみたのですが…。

「え？うーん…それなら鬼道君が良いんじゃないかな…？」

と、言うことで…。

「鬼道さん！！勉強教えて下さい！！」

「別に良いが…綾、意図がよく分からないんだが…。それに、綾はそこまで点数悪く無いだろう？」

「あう…実はあたし、テストの二週間前にいつも勉強し始めるんですけど…今回色々ありまして…。」

「なる程な…。マネージャーの仕事でリズムがズレたんだな？」

鬼道さんの言葉に力無く頷いた。

今はテスト一週間前、部活は休みに入っただから時間はあるのだが、あたしの頭では到底間に合わないだろう。

特に今回はいつもより範囲が広い。

お姉ちゃんも流石にあたしまでは手が付かないらしい。

そう言う事で、成績優秀な彼、鬼道さんに頼んだと言うわけだ。

「分かった。」

「本当ですか！？ありがとうございます！-！」

「但し、俺の教えは厳しいぞ…？（ニヤリ）」

「はうっ！が、頑張ります…。」

「じゃあ後で綾の家に行っても良いか？」

「はいっ！お姉ちゃんにはあたしから言っておきますね！じゃあまた後で！」

「ああ」

あたしと鬼道さんはそこで別れた。

…

…

家であたしは準備をした。制服と言う訳にもいかないので、白のミニワンピースを着て、上からジーンズのジャケットを羽織り、ニーハイを穿いた。

「こんなので良いかな！」

意気込んで居るとチャイムが鳴ったので玄関へと駆け足で出て行った。

「今開けまーす！」

ガチャリとドアを開けると…。

「あれ？風丸、さん？円堂さんまで…どうしたんですか？」

「否、どうせなら一緒に勉強しようと思ってな…！」

「みんなでやった方が楽しいだろ？」

円堂さん、完璧に遊ぶつもりですね…

風丸さんは苦笑しつつあたしを見た。

「何か、私服だとイメージ変わるな。」

「ふふっ！そうですか？」

そう言えば、私服を見るのは初めてな気がするなあ。円堂さんもジ
ーツとガン見して来た。そして人懐っこい笑顔を向けてくる。

「綾、可愛いな…！」

「ふえ…？」

「いつも制服とかジャージとかだからさ！何か新鮮で良いと思うぜ
？（ニカッ）」

「あ、ありがとうございます…。」

照れているためか、最後辺りの言葉は尻すばみになっているあたし。
そんな事しているとチャイムが鳴った。

扉を開けると居るのは勿論鬼道さんで、2人が居るのに驚いた。

「綾、どういう事だ…?」

「風丸さん達も勉強しなかった…良いでしょうか…?」

そんなあたしに鬼道さんは溜め息を吐いていた。

…

…

「だからここが…。」

「え?でも…あ、そっか!だからここが…。」

「そつだ、覚えが良いな、綾。」

「鬼道さんの教え方が上手いだけですよ!」

につこりと笑うと鬼道さんも笑みを浮かべた。ゴージャルの奥に微かに見える赤い双眸は優しくあたしを見つめていた。

「鬼道、円堂に理科教えてくれないか?俺、理科苦手だからさ!」
黒笑)

「(チツ) ああ、どこが分からないんだ?」

「全体的にわかんねえ!!」

…円堂さん、それは勉強以前の問題です…。何か鬼道さんも少し機

嫌が悪くなってしまった気がする…。風丸さんはいつも通り爽やかだけど…。

「うー…サッカーしたいー…。」

「円堂さん頑張りましょう?。」

「綾ーサッカーやろうぜ?。」

「駄目です!テストが終わってからしましょう?ね?。」

正直、どっちが先輩か分からない状況だ。

苦笑しつつ、よっぽどサッカーがしたいのか”うーうー”と唸る円堂さんを宥める。

「円堂さん!じゃあ、テスト頑張ったら良いものあげますから!…!ね?頑張りましょう?。」

「良いもの?!。」

「はいっ!だから頑張りましょう?。」

「おうっ!鬼道教えてくれっ!。」

「はあ…分かった。綾、すまないが問題解いて貰ってても良いか?。」
すまなそうに言ってくる鬼道さんに笑みをこぼす。分からない所は風丸さんに聞けば良いはずだし、大体は理解したからそこまで問題はない。

「よしっ！」

あたしは気合いを入れて問題へと向かった。

…

…

あっという間に時は過ぎ、テストが返ってくる頃。あたしはドキドキしながら結果を待っていた。そんな中、返って来たテストにあたしは驚いた。

「凄い…。」

全て90代の点数。

しかも、特に力を入れた数学は100点。

直ぐにお姉ちゃん達に報告すると誉めてくれた。(えへへ)そしてそのまま円堂の所に行き、言っていた”良いもの”を差し出す。

「クッキー…？」

「はい！あたしの手作りです！！嫌なら何か他のを用意しますけど…。」

「旨いな！！ありがとう綾！」

もう食べてました。

お礼として鬼道さんと風丸さんにもクッキーをあげた。2人も喜んでくれたのでとても

良かったと思いました！（あれ？日記…？）

あたしは、この時この時間が幸せすぎて、まだこれから起こる事、過去の出来事に気づけずにいた…。

恐怖…

「な…んで…？」

一日目の第一声が、その一言だった。

「綾ー！」

「あ、一之瀬先輩！風丸先輩まで…。折角ですけど、綾は今日お休みですよ？」

一気に脱力する一之瀬と風丸。

「？風邪か？」

「だと、思います…。あの…木野先輩もお休みですか…？」

不安気に聞いてくる春奈に首を傾げつつも、一之瀬が首を縦に振る。それにより一層顔を青くする春奈を不審に思い風丸が口を開いた。

「何かあったのか…？」

「確信は持てません。でも…もしかしたら…また”あれ”が起こったのかも…。」

「「あれ…？」」

「この話は綾に許可を貰わないと…。私は放課後、綾が気になるので綾の家に行きますけど…先輩達も来ますか？」

風丸と一之瀬は静かに頷いた。

…

…

「まさか豪炎寺さんまで来るとは思いませんでした!!」

「心配だからな。」

「綾はモテモテですね!お兄ちゃんも頑張つてよね!直ぐ取られちゃうよ?」

「…頑張ってみる。」

そんなこんな話をしていると、綾の家に着いていた。が、明らかに雰囲気がおかしい。

「何か…変ですよな?」

「カーテンが閉めてあるのに部屋に電気が付いていないな…。」

「いないのかな…?」

それぞれ疑問点を持ちつつ、家のチャイムを押した。一時してドアが開いて秋が顔を覗かせた。

「早く入って!!」

少し急ぎ気味の秋に首を傾げつつ、家の中へと入ると秋は直ぐにド

アを閉め鍵とチェーンをかけた。

「木野先輩…やっぱり、また”あれ”ですか？」

「うん…。此処じゃ何だし…入って？」

言われた通りに靴を脱ぎ、リビングに向かった。そして毛布にくるまっているであろう綾の姿が目に入った。

* * * * *

「綾、音無さん達が来てくれたよ？」

「春、奈…？」

「綾っ！！」

春奈が綾の元に駆け寄ると、綾も毛布から出て、春奈へと抱き付いた。

泣き腫らしたような後が真新しく残っていて、着替えていないのか、パジャマ姿の彼女はカタカタと震え、顔は青ざめていた。

「春奈、あたし、あたしっ！！」

「大丈夫、大丈夫だから、綾、あたしが傍にいるから…。」

春奈が綾を強く抱き締める。綾も”離さないで”と言うように春奈を強く抱き締めた。

ふと、綾は一之瀬達に気付いたのか視線をそちらに向けた。

「っ…！綾っ…！！」

「嫌っ！来ないでっ…！！」

ボロボロと泣き出す綾に一之瀬が寄り添うも待っていたのは酷く傷付いた様子の彼女と、拒絶の言葉だった。

「綾…？」

「嫌っ！嫌嫌嫌っっ…！！…帰って下さい…！！」

狂ったように泣き叫ぶ綾にどうする事も出来ず、一之瀬は只立ち尽くしていた。

* * * * *

一之瀬 side

「帰って下さい…！！」

拒絶の言葉に頭の中が真っ白になった。

仲良く、打ち解けられたと思っていたのに…一方的に拒否された。未だに泣いている彼女に声を掛けようと口を開いたが、出かけた言葉のまま飲み下した。

「（声を掛けても…その後、何を言えば良いんだろう。）」

ぐると拒絶と迷いと不安がそれぞれ交差しては渦を巻く。
そんな中、豪炎寺だけが、口を開いた。
発した言葉は…

「嫌だ。」

その一言だった。

呆気にとられた…。

綾も驚いた表情をしていて、こんな一言で空気を帰られる豪炎寺は
凄いと思った。正直、羨ましい…。

豪炎寺はそんな事は全て無視して、綾へと近づいて行く。

「俺達は、そんなに頼りないか…？」

「違う「俺は、綾に頼って欲しい。」え…？」

「だから、何があったのか…知りたい。」

「豪炎寺さ、ん…。」

豪炎寺の強い眼差しに負けてか、綾は一つ、首を縦に振った。
一時して、綾は口を開いて話し始めた。
自分の、過去の出来事を…。

恐怖：（後書き）

次回綾ちゃんの過去の話を書かせて頂きます！！
駄文でごめんなさい！！。・・（っ、）

ここまで読んで下さった方々、感謝です！！頑張って次も書かせて
頂きます（、・・、）

理由と解決

豪炎寺さんに言われ、あたしは話す決意をして、口を開いた。

「あたしが入学したての頃でした。あたしは、ストーカーにあいました。」

淡々と話す綾にみんな静かに耳を傾けていた。

「最初は無言電話とか、たまに後ろに気配を感じたりだったんですけど…段々エスカレートしていつて…。」

「綾、見せても平気…？」

心配するお姉ちゃんに頷いて、机に紙が置かれる。それも数枚や数十枚と言う軽いものではない。どう見ても軽く100は越えているであろうそれ。

「コレって…。」

「綾の映った、写真…？」

あたしは静かに頷いて、”他にもまだ沢山あります。”と、悲しげに写真をみつめていた。どの写真もカメラに目を向けて居ない。制服姿や体操着。水着やパジャマなど。

酷いもので着替えている所もある。（流石にこの中には入れてないけど…。）

「犯人とか、分かっているのか？」

風丸の言葉に首を横に振る。

あたしは俯きながら写真の中に紛れ込んでいた一枚の折り畳まれた紙を手に取り、広げた。書かれていたのは…

>>キミをずっと見ているよ<<

その一言だった。

パソコンで打たれているのか、特徴のない、少しかくかくの文字。それがまた不気味さを感じさせる。

「他にも、コレと同じ様な手紙が何通も綾宛てで来るの。」

お姉ちゃんが悲しそうにそれを見つめる。

お姉ちゃんは悪くないのに…。

あたしのせいで…こんなに悩んで、苦しんで…。

”ごめんなさい…”

心の中で囁いた言葉は、あたしの頭の中だけで響いていた。

* * * * *

「綾の男性恐怖症はコレも原因何だけど…一番は…倉庫に閉じ込められたこと。」

お姉ちゃんが口にして、あたしの肩はびくりと反応を示した。それに気付いた春奈が強く抱き締めてくれる。

「路地裏に連れ込まれて…そのまま閉じ込められたの。」

今でも、あの事は鮮明に残っている

…

…

あの日、あたしは学校帰りに裏路地に連れ込まれて、睡眠薬で眠らされたんだ。

気が付いたら倉庫みたいな所にいて、幸い、携帯があつたからそれでお姉ちゃんに連絡とったけど…正直、待つてゐる時間が凄く不安だった。

「お姉ちゃん…早く来てよお…。」

膝を抱えてひたすら震えていた。

暗くて、誰もいない広い部屋。

反響する自分の声。

全て、自分を追い詰めてくる様で…。

凄く、怖かった…。

…

…

ふとした拍子に思い出す記憶。

それ以来、あたしは暗い所と男の人が怖い。軽く触れるなら兎も角、後ろから抱き付かれたりされたら震えが止まらなくなる。

「あたしは…。」

これからも…怯えて行かなくやいけないのだろうか…？折角、あの
人から光を貰ったのに…。

「落ち着いたか？綾。」

「はい。大丈夫ですよ？鬼道さん。」

ぎこちなく笑って見せる。

いつも通りとはいかないけれど…みんなが来てくれたことで、心配してくれたことで……安心できた事は確かだから…。

「先輩方。拒絶して、すいませんでした…。それと…心配してくれて…嬉しかったです！ありがとうございます。」

今の、あたしの精一杯の笑顔を…。

* * * * *

「これからどうするんだ？」

風丸さんが口を開いた。

確かに、犯人が分からない限り、どうすることも出来ない。

「おびき寄せますか…？あたし、脚には自信がありますから…。」

「本人が行くのは危険だろう…。」

鬼道さんが言っ、ある一点を綾以外が見つめる。

「………何で俺を見つめるんだよ…。」

風丸さんだった。

確かに、男にしとくのが勿体無い位の美人さんだが…。

「風丸さんに失礼な気がします…」

「否、綾本人がやるよりは良いと思うぞ？」

「そう言えば、風丸君とは身長とか体型も似てるもんね！」

豪炎寺さんは兎も角…。

お姉ちゃん、それ…あたしが男の人位ぺちゃんこって言うてる気がするよ…。（確かに無いけどさ…。（泣））

「風丸さん！これ、綾の制服です…！」

何か嬉しそうな春奈。あたしの制服って…いつの間に…

「風丸君！お願い…！綾の為だと思って！」

あたしを餌にするお姉ちゃん。

「女装何て嫌「風丸さん…！」あ、や…？」

「お願い…出来ませんか…？」

正直、あたしも風丸さんの女装姿を見たかった…。（だって絶対似合うもん…！）

ジッと見つめていると風丸さんが溜め息を吐いた。

「今回だけだからな…」

「…やったあ…！」

あたしとお姉ちゃん達の声が重なった…。

…

…

「凄い…。」

「女の子みたいね!」

「風丸さん、可愛いですよ?」

「…。嬉しくない…。」

落ち込み気味の彼。

だが、そんな姿もとて映えている。

それにあたしの髪型に似たウィッグを付けていて、隠している片目はきちんと見えるようにした。勿論あたしの制服を着ている。(春奈と同じだよ!)

「風丸さん! ツーショット撮りましょう!」

「(ツーショット…) 撮る!! (拳グツ!)」

「爆発スト! 豪炎寺君!! 家の中だから!」…。

「皇帝ペンギン! お兄ちゃん…? (黒笑)」チツ…。」

「風丸…羨ましいなあ…。(ぼそつ)」

……シリアスが消えてきた気がする。

そんな事を気にせず、女装した風丸さんに興奮気味のあたし。(だ

って可愛いんだもんっ！！）写真はきちんと保管する事にした！

「風丸さん…後は…お願いします。」

「任せておけ。」

につこりと笑う彼に、あたしは同じ様に微笑んでいた。

…

…

一時して犯人を捕まえたと連絡が入り、あたしとお姉ちゃん、春奈はその場へと急いだ。そこには鬼道さん達と、1人の精悍な顔つきをした二十歳前後の男の人がいた。

「綾ちゃん…だよね…？」

男に声を掛けられて、咄嗟にお姉ちゃんの後ろに隠れる。少し顔を覗かせて、脅えつつも小さく頷いた。

「…怖かった…よね…。」

男の問いにまた一つ頷くあたし。

周りのみんなはソレを静かに見ていた。

「盗撮とか、閉じ込めたりとかして、ごめんね…。でも、俺は、悪い印象でも良いから、君に覚えて欲しかった…。」

「だからって…やって良い事と悪い事があるだろうっ?!」

「俺は君達とは違うんだよっ！！！！」

風丸さんの言葉に、男は声を荒げた。

あたしもだが、風丸さんも驚いている。

男は”ごめん”と言呟いて、また口を開いた。

「俺は…一般人だから…毎日逢う、君達とは違うんだよ…。」

悲しそうに呟く彼。

演技とはどうしても思えなかった。

あたしはそんな彼に歩みを進めた。

男は驚いた顔をする。

みんなは制止の言葉をかける。

あたしはそれを無視して、未だに震える手をキツく握り締めた。

「名前…。」

「…え…？」

「名前…教えて下さい。」

少し震えた声であたしが呟く。

怖かったけど…あたしはこの人の気持ちに答えないと…。逃げ出して、傷つけるのは…もう、したくなかった…。

カドウ ミカド
「火童 帝」

「帝さん…これで、他人じゃないし、あなたの事…きちんと覚えま
した。」

にっこりと笑って見せると、帝さんは拍子抜けした後、綺麗に笑みを浮かべた。

初恋の人

あれから、帝さんとはメル友になった。

意外に優しい人で驚いたけど…多分、これが本当の彼なんだと思った。

あたしの男性恐怖症も治りつつある、今日この頃、事件は起きた。事の始まりは一之瀬さんの一言だった。

「綾って、今までも少し男嫌い治ってたよね…？どうして？」

「…え…？あ、あの…それは…っ／／／」

無意識に顔が赤くなっていたらしい…。

事情を知っているお姉ちゃんと春奈はにやにやとあたしを見ていた。

「綾の初恋の人のおかげよね」

「おっ、お姉ちゃんっ！！？／／／」

恥ずかしくて死にそうだ…。

お姉ちゃんの馬鹿…。

「で、でもっ！あの事があってからだよ？！気になりだしたのは！
！！」

「あの事…？」

…墓穴掘りました…（泣）
一之瀬さん達の目が怖い…。

風丸さんは意味ありげな笑みを浮かべている。鬼道さんと豪炎寺さんは横目で見ていた。そんな状況の時…

「綾っ！あの事解決したのか？！」

「え、ええ、円堂さっ！？／＼／」

「「お前か円堂…。」」

「ん？何か…みんな目が怖いぞ…？（汗）」

「円堂、しっかり話して貰うぞ？」

風丸さんが円堂の肩をミシミシと音が鳴りそうな程に掴む。他の人は笑顔で円堂を囲んでいた。

「え？ええっ？！何なんだよー！！？」

「すいません、円堂さん…。
事件はまだ続いたりする。」

* * * * *

あれはストーカーが始まって、間もない頃だった。閉じ込められて、数日たったある日の事。

…

…

「綾、本当に大丈夫？」

「お姉ちゃん…大丈夫…だよ？」

震えた声…。

泣き腫らした大きな瞳…。

それらが現実を知らしめるようで痛々しい。

今は部活の時間。

お姉ちゃんがサッカー部のマネージャーをしてるので、一緒に帰るために待っている。

あたしが攫われた…。

その一見にシヨックを受けたのが、最近、良くお姉ちゃんと行動する。

「あの…。」

2人の少年が声を掛けてきて、あたしの心拍数が一気に上昇する。話し掛けて来たのは、オレンジ色のヘアバンドをした少年と、さらさらの長い髪をポニーテールにした片目の少年。

…体が無意識に震えた。

自分を守るように抱き締めて、その2人を見詰めた。

「お前！サッカー好きなのか?!」

「…え…?」

ヘアバンドの男の子が瞳を輝かせて聞いてくる。例えて言えば、遊んでいる子犬。

急な事に拍子抜けした。

「円堂、困ってるだろ？」

「んー…なあ！ちよつと来てくれないか？」

「えと…あ、きゃあつ？！！」

円堂と呼ばれた男の子はいきなり手を掴んであたしを連れて走り出した。

後ろでもう一人の子が騒いでいる。

円堂さんはそれが聞こえていないのか、はたまた無視しているのか…。

兎に角、今あたしが分かるのは、さつきみたいな震えが無いこと。そして、一回り大きい彼の手が、暖かいと言う事だけだった。

「あ、あの！何処へ行くんですか？！」

走りながら聞く。

が、答えは返って来ることはなく、一つの場所に着くと足を止めた。

「此処だ！！」

「此処…鉄塔広場…？」

「じゃあ行くか！！」

「え？」

…

…

「すげえだろ？」

「っ…!!」

声が出なかった。

本当に感動は言葉が出ないとは聞いたことがあるが…実際に感じてみるとその通りだと確信した。

今あたし達が居るのは鉄塔の上。

そこからはあたし達の住んでいる稲妻町が一望できた。

今は丁度夕日が沈もうとして傾いている時間帯。

それが光と陰のコントラストを生み出していた。

あたしはそれを食い入る様に見つめていた。

「俺、落ち込んだ時とか悩んでる時とかに此処に来るんだ。そしたらさ、自分がちっぽけに思えて、落ち込んでる事が馬鹿らしく思えて来るんだよなっ!!」

「円堂…さん…。」

この人はあたしが悩んでる事に気付いて居たのだろうか…?

あたしは景色から視線をズラして、円堂さんを見詰めた。それに気付いたのだろうか? 彼はこちらを見て人懐っこい笑顔を向けて来る。それに、ポロリと何かが零れて、頬を伝った。

「え?! 俺、何かしたか?!」

あたしは彼の問いに無言で首を横に振った。そして笑顔を向けると、彼も理解したかのように、優しく微笑んだ。それを、夕日だけが佇んで見つめていた。

…

…

「て事があつたのよね? 綾?」

「うう… / / /」

お姉ちゃんは今々悪魔に見える。（いつもは天使的な感じ。）
あたしは顔の熱を冷ますように、手で仰いだ。
今日も晴天。

あの日の太陽は、今もあたし達を見つめている…。

転入生！！

「サッカーの専門学校…？」

「うんっ！その生徒が転入して来るんだって！！」

お姉ちゃんが笑顔で言った。あたしはそれに釣られて笑ってしまう。どんな人が来るのだろう…？

あたしは友達ができるかわくわくしながら、軽い足取りで学校へと向かった。

「綾！今日、サッカーの上手い生徒が来るんだよ！！楽しみだね！お兄ちゃん達の反応が！！」

「…？何で鬼道さん…？」

「綾、天然で可愛いVV」

春奈は良く、訳の分からない事を言う。

鬼道さん達って事は…サッカー部関係？

あ、サッカーが上手い人が沢山来るからか！！円堂さん喜びそうだなあ…。

何て考えていると、H・Rが始まって、3人の生徒が教室に入ってきた。

紫の長い髪をした女の子と、オレンジのショートカットの髪をした女の子。

そして、円堂さんと同じ様な子犬の雰囲気を持つ、亜麻色の髪をした男の子だった。

「陽花戸中から来ました！立向居勇気です！」

「エイリア学園から来ましたアイシーです！よろしく！」

「同じくエイリアから来たレアンです。よろしくね？」

男の子は立向居君、紫の髪の子はアイシー、オレンジの髪の子がレアンと言っらしい。

3人とも顔が整っていて、正に美男美女の集まりだ。周りの生徒は可愛いとか、格好いいとか、色々騒いでいる。

「綾、どう思う？」

「何が？了ちゃん？」

隣の席の 宮坂 了 通称、了ちゃんが話し掛けてくる。（可愛いけど、列記とした男）

あたしはそれに首を傾げて、次の言葉を待った。

「立向居勇気って奴の事……！」

「？うーん……話した事無いから分かんない！」

「否、そうじゃなくて……」

益々分からなくなつて、名前が出た、立向居君を見た。すると、視線に気が付いたのか、しっかりと目が合う。

反らすのもアレなので（アレって何だ）につこりと笑って見せる。それに立向居君は顔を赤くした。

”被害者一名”

そう春奈がメモしていたのをあたしは知らない。

* * * * *

「綾は危機感無さ過ぎるよっ!!」

H・Rが終わった後、あたしは了ちゃんに怒られていた。理由はよく分からない。

「危機感無さ過ぎるって言われても…」

熊とか出るわけじゃないし…。

男の人にも馴れてきたし…。

了ちゃんが何を言いたいのか、いまいち良く分からない。

首を傾げると、了ちゃんに呆れられた。(バカでごめんなさい…。)

「大体、綾は可愛いんだから自覚持たないと!!」

「か、かつかつ可愛い?!!!/!/」

了ちゃんは天然女殺しな気がする。

自覚って言われても…。

「あたしはお姉ちゃんや春奈みたいに可愛く無いもんっ!!」

「でも、綾告白されたじゃん。」

「あれは…うう…」

確かに何で可愛くないあたしに告白なんてしてきたのだろう…？

「うーん…分かんないよお…」

「「初めましてっ!!」」

不意に声をかけられてそちらに目を向ける。

「アイシーちゃんとレアンちゃんだっ！」

声を掛けてきてくれたのは転入生のアイシーちゃんとレアンちゃん！どちらも可愛い笑みを浮かべてこっちを見ていた。

「ちゃん付けしなくて良いよ！名前教えて？」

アイシーちゃん…じゃなく、アイシーが笑顔を向けて言ってくるので、あたし達は自己紹介をした。

「綾と了君って…付き合ってるの？」

「突き合う…？月会っ…？」

「綾、いろいろと違う」

レアンに注意されてしまった…。

「俺は諦めの身だから、今は先輩を応援中！」

「了君諦めたんだ？ふーん…。」

アイシーは意味深な笑みを浮かべて、あたしを見ていた。
それに気付くのはあと何秒後…？

王子様…？

「ねえ、二年の教室行かない？」

アイシーが尋ねてきて、別に断る理由も無いので、頷いて二年のいる教室塔へと向かった。了ちゃんは用事があるらしく、教室で別れ、あたしはアイシーとレアンと一緒に二年の教室塔へと来た。

「あたしねっ綾にお兄ちゃん紹介したくてっ！後、あたしのチームの…ダイヤモンドダストって言うんだけどっ！ガゼルとか！！」

「ならあたしは、ウル姉やボニトナにも逢わせたいな」

「クララとマキュアもっ！！」

…どうやら今から沢山の人に逢わせられるようだ。

2人は可愛らしく騒いでいるが、端から見ているあたしからしたら訳の分からない事で、首を傾げる事しか出来なかった。

「あっ！！バーンとガゼル発見！！」

レアンが指差した方向に目をやる。

そこには、赤い髪チューリップの少年と銀髪（寝癖かな…？）の少年。

どちらも顔が整っていて、かなりの美男子。あたし達の視線に気付いたのか、少年2人はこっちに歩み寄って来る。

「レアン、アイシー…何で二年のところにいんだよ…。」

呆れたように赤髪の先輩（だよね？）が言う。銀髪の先輩はあたし

に気付いたのか、あたしをジッと見つめていた。

「綾、赤髪チューリップがバーンで、銀髪寝癖がガゼルだよ！」

「レアン、バーンは兎も角、私の髪は寝癖じゃないよ。」

「俺もチューリップじゃねえよっ！！」

「ふふっ（笑）」

レアンの説明もだが、先輩のやり取りに笑ってしまった。
ボケを真面目な顔で返すガゼルさん。
切れ気味のバーンさん。

アイシーとレアンはそれにケラケラと笑っていて…。
それにクスクスと笑っていると、4人が視線を向けて来ていることに気付いた。

「えっと…。な、何ですか？」

思わず聞いてしまった。

か、顔に何か付いてるとか？！！

「君、綾…だっけ…？名前。」

「綾…ですけど…？？」

名前を聞いてどうするんだろう？（あ、あたし、人間不信みたいだ）

「可愛いな、お前。」

「は…い…??え…か、かわつ?!／／／」

最近、やけに可愛いと言っ言葉を聞く気がする…（慣れたら良いのに…）

バーンさんがまじまじと見つめてくる。

思わず一歩後ずさるが彼も一歩近付いて来て、あたしがまた後ずさる。

つまりは堂々巡り…。

「ひゃあっ!!」

「うわっ!!」

周りを見ずにそんな事をしていたためか、誰かにぶつかり、転けそうになる。

が、それも誰かに支えられ、阻止された。

「あ、ありがとう御座います…。」

「……。」

振り返ってみて、そこにいたのは赤い炎を象ったヘアバンド。

漆黒の闇を思わせる大きな目をした、顔の整った美少年。

そして、無様に（失礼）倒れているクリーム色のツンツンした髪をした美少年。

ここにはイケメンしかないのだろうか…。そこで、ふと思い出す。

あたしは、人にぶつかったんだ…。

あたしは血の気が引いて慌て倒れてる人の所へ駆け付けた。

「うっ！ごめんなさいっ！！あたしっ！！」

「ああ、良いよ？俺の不注意でもあるし！」

につこりと優しく笑う彼に思わず目を丸くした。何だろう…オーラ
と云うか何と云うか…。微笑む彼は王子様の様で…。

「っ ！！／／／」

反射的に顔を赤くするあたしがいた。

綺麗なアクアマリンの双眸がこちらを見ている中。あたしは呆然と
立ち尽くしていて、ふと、気が付くと何故かバーンさんの腕の中だ
った。

……………ん？

腕の中……………？

「ひゃあああっ！！な、何してっ！！／／／」

「ヒートに見とれてただろ。（ニヤリ）」

「はうっ！！」

勘がいい…

でも、多分女の子なら誰でも見とれてしまふと思う。
ヒートさんはそれ位の美男子だ。

「好きなのか？」

本人の前でなんて事言っつのでしょこの方。少し泣きたい。

よくよく考えてみると。

あたしは抱き付かれてるのを、みんなに見られているわけで…。

「あ、え…いや、あのっ！！！！／／／」

”その前に離して下さい”

そう紡ごうとした言葉は、止められてしまった。いや、止まった…の方が良いかもしれない。

「い、いいっ！！今っ？！！／／／」

あたしは右頬を押さえてわなわなと震えていた。この時点で大体察しは付くだろう。

頬に…き、ききっキスされ、れれっ！！！！／／／

口をパクパクさせていると「金魚みてえだな」と笑われた。（あなたが原因ですよ…）

穴があつたら入ってそのまま埋めてもらいたい気分だ。（あれ？死んじゃう？？）

「バーン死ねっ！！真面目に死ねっ！！！！」

アイシーが今まで黙っていたのにキレた。

レアンはものすごい顔でバーンさんを睨んだ後にハンカチであたしの頬を力強く拭っていた。（レアン…痛いよ…）

「はあっ！！？っざけんな！！！！」

「バーン！！反論する前にこの子に謝らないとだろうっ？」

「謝った方が良くぞバーン。私もだが…ネッパーがキレかけている。」

ふと脇をみるとヘアバンの美少年は目で人を殺せそうな感じだ。ガゼルさんもガシガシと前髪を掻いている。空気が冷たい…。

理由はよく分からないが…。

バーンさんも死を察知したのか、顔が青い。

「綾…すまねえ…。」

「いえっ！驚いただけですからっっ！！／＼／＼」

「綾、この変態チューリップは一度死なないと分からないのよ…。」

無言で3つ、サッカーボールを取り出すレアン。ボールはアイシー、ガゼルさん、ネッパーさんへと渡り…

「『ノーザンインパクトッ！！』」

「ガニメデプロトンッ！！！！！！」

…。

その日、学校中にバーンさんの叫び声が響いたらしい…。

今日の格言。

女の怒りは恐い。以上！！

新しい先輩方

「バーン最低っ！！綾平気？」

「あたしは平気だよ？驚いただけだから！」

レアンが未だにキレている様子で、あたしの為に怒ってくれているのが堪らなく嬉しい。にっこりと笑って見せるとレアンは照れたように頬を染めた。

「綾健気で可愛い！！もおっ好きっ！！」

「えへへっあたしもアイシー好きだよ？」

「綾！！あたしはっ？！！」

「レアンも好きだよ？」

「綾、嫁においでっ！！」

アイシーに真面目に告白された。
取り敢えず…。

「えいつ！！（ぎゅーっ）」

抱き締めてみた。

アイシーはあたしより少し背が高い。

髪の毛サラサラで良いなあ…。

睫毛長いなあ…。

何て見ているあたしに抱き締め返すアイシー。

それに対抗してか否か…レアンが背中に抱き付く。

「うー…動けない…。」

「アイシー…？何してるんだ？」

「ぎゅーっしてしてるの？マキユアもするっ…！」

「あら…？見たこと無い子ね？」

「あら本当だわ！可愛い…！」

「天然っぽい子ね。」

美人さんが5人も来てしまいました。

* * * * *

「綾、紹介するね？」

レアンが可愛らしく笑って説明を始めた。

エメラルドグリーンの長い髪をした眼鏡をかけたお姉さんがボニトナさん。

クリーム色の髪をした美脚なお姉さんのクリプトさん。

空色の髪に白のメッシュが入った格好いい系の美人さんのウルビダさん。（通称ウル姉）

アクアマリンの髪を扇風機（失礼）様にしたにこにこと笑顔の可愛らしいマキュアさん。

青いショートカットの冷徹美女、クララさん。

美しい5人が加わって、あたし1人だけ浮いている気がした。（あたし…地味）

「綾綾マキュアの事はマキュアって呼んでね！！マキュアさん付けきらいっ！！」

「マ、キュア…？（キョトンっ）」

「（きゅーんっ）綾可愛い！！」

マキュアに気に入られました。

あたしは可愛くないのにつ！！マキュアの方が何千億も可愛いよおっ！！！！

首を必死に横に振っていると、笑われてしまった…。うう…。（泣）

「着せ替え人形にしたいわね。」

「良いわね！！ショーみたいなモノを開きたいわ」

クララさんがクスリと怪しげな笑みを浮かべてあたしを見てくる。ポニトナさんとクリプトさんも同意したように綺麗な笑みを浮かべていた。

つまり、あたしの逃げ場はないらしい。

「あ、あのっ！！あたし…っ！！」

” 用事が…”

そこで言葉に詰まる。

何故なら…。

「今度色々持つてきましょう！！」

「マキュアはメイド服借りてくるね！」

「あたしは…あっ！アレ持つて来よ！アイシーは…？」

「あたしはゴスロリ的な服を持つて来る！」

…話なんて聞いていないから…。

…何かすごい会話ばかり聞こえてくる。
着せるなら普通の服にしてほしいなあ…。

あたしは1人、ため息を吐いた。

地獄の鬼ごっこ

「綾、身長とスリーサイズ教えて？」

「はえ……？」

クリプトさんがにこにこ笑っている。

え……スリーサイズ……？

「分かりません……」

「計った事ないのっ?!?!」

その言葉に頷くと彼女は嬉しそうに目を輝かせた。

「じゃあ、あたしが計って良いのよね??」

「……はい……？」

あれ?何か変な方向に……。

「さて、行きましょうか!綾!」

「え、ええっ!?!?!?」

…

……

「綾、あんまり無いのね……胸。」

「うう…」

チラッとクリプトさんの胸に目をやる。（変態じゃないからね?!）
そして自分のそれに目をやる。

……まな板…。

ウル姉やボニトナさんかなりあったなあ…分けてほしい…。
切実にそんな事を考えているとがチャリとドアが開いた。

「クリプト！例の演劇部から借りて来たわよ！」

「ありがとう！ボニトナ、ウルビダ！」

「綾の事も考えた方が良くと思うんだが…。」

「あら？ウルビダ、そんな事言って、貴女が一番楽しみにしてるの、
私知ってるわよ？」

「ウルビダ、可愛い子好きだものね」

…話が見えていないのはあたしだけでしょうか……？

ふと、ウル姉と、ボニトナさんが持っている衣装らしきモノに目を
やった。

目に入るのは青いドレスや赤のワンピース。

「シンデレラと赤ずきんちゃん？」

「そうよっ よく分かったわね!!」

嬉しそうなクリプトさん達にあたしは顔をひきつらせた。

「ふふっ 逃がさないわよ…？」

私、木野綾、死亡フラグ確定みたいです……。

* * * * *

「ひいやあああああつ!! (泣)」

「綾ちゃん待ちなさいっ!!」

ボニトナさんがあたしを呼ぶが、今あたしは止まれる状態じゃない。と言うより……。

「い、嫌ですっ!!!!」

止まりたくないが正しい。
だって、今のあたしは……。

うさ耳付けた、赤ずきんちゃんのコスプレをしているから。

普通に着替えるだけならまだしも、「他の人にも見せましょう!」

何て、笑顔で言うものだから……。

あたしは逃げているのだ。

まあ、廊下を走っている時点でかなり目立つのだが……。 (マジマジと見詰められるよりはましだねっ?!!)

「綾ちゃ…足速…っ!!」

「自信ありますからっ!! ボニトナさんさようならです!!」

あたしはスピードを上げてボニトナさんを撒く。

これで大丈夫と思ったのもつかの間。

ぴんぽんぱんぽーんっ

可愛らしくチャイムの音が鳴って、放送が入った。

>>今日和！私は転入生のボニトナです！<<

声の主はボニトナさんだった。

…不意に、冷たい何かが背中を滑り落ちた。いやな予感がする…。

>>皆さんにお願いです！実は演劇部の赤ずきんの衣装が盗まれてしまいました！！誰かが着ているのですが、足が速くて追いつけませんでした。そこで！！その子をつまえてくれた方に学食一年間無料券を捧げます！！てことで、つまえてくれた方はサッカー部部室まで　　<<

ぶつりと放送が切られた。

瞬間に、あたしに集まる視線。

ゴクリと生唾を飲み込み、あたしは短く息を切ったあと、足に力を入れ、駆け出した。

「逃げたぞーっ！！！！！！！！」

「!!!!!!?」

一斉に追ってくる人たち。

ゾクリと毛が逆立つ。

ふと、あたしは窓の外を見た。誰いないグラウンド…。ここは…二階だ。

決心したあたしは、窓枠に足をかけ、飛び降りた。後ろの面々は驚いた声をあげる。

あたしは何とか着地して、そのまま走って逃げた。

「どうしよう…。」

体力的にまだ大丈夫。

だが、これは時間制限なしの鬼ごっこ、いや、泥棒1人のケイドロ、と言った方が正しいかもしれない。

「お姉ちゃん……。」

怖い…。

助けて…。

「

」

ふと口にした名前は、風に溶け、自分でも聞こえない囁きとなって消えた。

苦手な人、細やかな幸せ

「はあはあ…。」

どれくらい走っただろうか？

多分、二時間は経っているであろう、なのに未だにあたしは追われていて、体力もそろそろ限界だった。

「赤ずきんちゃんみーつけたっ」

「?!?!?!?!」

声にならない叫びと共にビクリと肩が上がった。振り返ると、ふわふわの銀髪をした少し背の低い垂れ目の少年。

ニコニコと笑っていて、見た目は天使だが、あたしは彼の笑顔に裏があるのを直感的に感じていた。

すぐさま逃げようとするが、それは彼の手によって阻まれた。

「僕は別に君を捕まえようとしている訳じゃ無いんだけどなあ…。」

あたしの右手を掴み苦笑を浮かべる彼。

よく見ると初めて見る顔で、彼は転入生なんだと分かった。

が、それとこれとは別。

「放して下さいっ!?!?!」

「君可愛いんだねっ!?! 気に入ったよ!」

気に入るとか、今はそんな事どうでも良い。あたしは只、ここから

逃げたいんだ。

抵抗の意を込めてあたしは右手を思いっきり振った。しかし、掴まれた手は解放される事はない。いったいこの細腕にどれだけの力があるのだろうか？

あたしは彼をじろりと睨んだ。

「どこの誰かは存じ上げませんが、迷惑です！放して下さい！！」

「僕はもう少し、君とお話したいな？」

にこつと効果音が付きそうな笑顔。

あたしが苦手なタイプだ…。

あたしは1つ溜め息を吐いた。

「綾っ！！！！」

ふと名前を呼ばれてそちらに目を向けると、駆け寄ってくる一之瀬さんの姿。

「一之瀬さん！！」

助かった！！とあたしはそちらに向かう。

が、それすら許されずに、彼の元に戻らされる。

「いい加減にして下さい！！！！」

「吹雪！」

吹雪…？

この人の名前だろうか？

チラリと顔を伺うと彼はにっこりと笑って、よろしくね？綾ちゃん？、何て言ってくる。

やっぱり、あたしはこの人が苦手だ。

「吹雪？いい加減にしろよ？」

「やだなあ一之瀬、男の嫉妬は醜いよ？」

笑顔だが、今にもキレそうな一之瀬さんを逆立てするように吹雪さんがちやかす。

ふと、意識がそちらに行っているのか、掴んでいる手が緩んだ。その瞬間にあたしは手を振り払い、一之瀬の後ろへと隠れた。

「綾っ！！（か、可愛い！！！！）」

「一之瀬さん、逃げましょう？」

あたしはこの人というのは嫌だ。

裏があるって言うのがよく伝わるから。

一之瀬に小首を傾げて聞いてみれば、彼はにっこりと笑ってあたしの手を引いた。

「嬉しいなっ！綾が俺を頼る何て！！」

「えへへっ信頼…してますから。」

繋いでいるあたしより一回り大きな手をぎゅっと握った。

あったかい…。

只それだけなのに1人じゃないって、分かる事がとても嬉しくて…。単純なことに、あたしは幸せを感じていた。

* * * * *

一之瀬 side

放送が入って、いやな予感がした俺は綾を探し始めた。まず教室に行ってみたが彼女の姿はなく、俺は赤ずきんを探し始める。どこを見ても、学食目当ての生徒が目立つ。ふと、二階から飛び降りる赤色が視界に入った。

「綾…？」

顔は分からないが見えた髪の長さや身長などからして彼女に見えなくもなかった。

すぐさま彼女を追うと、廊下で白銀の跳ねた髪をした少年、転入生の吹雪に捕まっている彼女。

「放して下さいっ!!」

ソプラノの声が廊下に響いた。

「綾っ!!!!!!」

名前を呼ぶと綾と目があつた。

うさ耳に赤ずきんの服…。

…… J a p a n e s e …… 萌…???

言ったら綾に嫌われそうだけど…。

かなり似合っていると思う。

特にうさ耳辺りが…。

「一之瀬さん!!」

微笑む彼女にニヤケそうな口元を引き締める。(ヤバイヤバイ!!)
俺は吹雪を軽く睨み付けた。
彼は笑顔でこちらを見ている。

「一之瀬さん、逃げましょう?」

え、愛の逃避行…?

じゃ、ないか。

彼女を見てみると吹雪と何か合ったのか、嫌そうな顔で彼を見つめていた。

大方、早くこの場から離れたいらしい。

俺はそれに同意し、自分よりも一回り小さな手のひらを握り、その場を後にした。

「嬉しいなっ!綾が俺を頼る何て!!」

「えへへっ信頼…してますから。」

はにかむ彼女。

小さな手のひらが俺の手を強く握った。

”愛おしい”

この事を、この想いを、そう言うのだろうか?
俺はそれに、無言で握り返した。

進展…？

「綾、脱いで。」

「え…あ、う…。」

「恥ずかしがらないで？俺だって、恥ずかしいんだよ…？」

「一之瀬…さん…。」

誰もいない教室。

静かな2人だけの空間で、彼がそう言う。

あたしは恥じらいつつも、彼の言葉に頷いた。

さて、…誤解されてる方。

色々違うのでご安心（？）下さい。

何であたし達がこんな会話をしているかと言うと…。

…

…

「それにしても、綾の格好…目立つよね。」

「です、よね…？」

赤色をモチーフにしたこの服は相当目立つ。周りが制服だから特にだ。

「じゃあ、俺の制服と交換しようか…！」

「ええっ…!!？」

…

って訳。

…

「後ろ見とくから！！ズボンは後でいいよね？はい！俺の制服！」

「へ？」

ふと、気付くと彼は上半身裸でした。（ふ、普通、シャツとか着てるよね?!）

「き、きゃっ「しっ！！騒いじゃ駄目だよ！！」くくくっ！！／／」

あたしの口元を声が出ないように押さえる彼。当然の様に距離は縮まっていて、目と鼻の先。心臓は爆発寸前だったりする。
今のあたし達の状態は、かなりヤバいのではないだろうか…？

「いち、せ…さ。」

「何か、キス、したくなる距離だよね？」

「つつ！！！！？／／／」

あたしは…どうすれば良いのでしょうか？

「あ、あのっ！！いち…「俺。」！！」

「本気…だよ？」

「……？！！！！／／／」

真剣な彼に戸惑っているのか、はたまた、単に混乱しているだけなのか…。

一之瀬さんの瞳から視線が外せなくて…。

「ねえ…綾…。」

”ダメ…？”

低く耳元で囁かれて、ぞくんと身体が震えた。麻痺した様に力が入らなくなる。思考が停止していて何も考えられない。

「い、ちの…せ、さん…。」

「綾…「いたかー？！！」？！！！」

誰かが捜している声がした。

あたし達2人はビクンと身体が震えて現実に戻されたようになお互いに距離を取る。

「は、早く着替えた方が良いかもなっ！／／／」

「そ、そうですねっ？！！／／／」

急いで着替えると、一之瀬さんはあたしの代わりに囿になる！と、走ってどこかに行ってしまった。あたしは1人、誰もいない教室に座り込んだ。

「あたし…。」

もし、あのままだったら…。

「キス…してたのかな…？」

ふと、自分の唇に触れる。

瞬時にさっきの事を思い出して、顔に熱が集まった。
煩い心音に、悩みが一つ増えた。

「明日、どんな顔で一之瀬さんに会えばいいんだろう…？？」

あたしは抱えた膝に顔を埋めた。

* * * * *

「綾、最近一之瀬君を避けてない？」

「はうつ…！あうつ…。」

お姉ちゃんに言われて、グサリと何かが胸に刺さった。

確かに…最近、あたしは一之瀬さんを避けている。

会うつついこの間の事を思い出すから。

嫌いな訳じゃないが、恥ずかしくて仕方がないのだ。

「何かされた？」

ビクンと肩が上がる。

気付いた時にはすでに遅く、お姉ちゃんは恐いくらいの（実際恐いけど…）笑顔をあたしに向けていた。

「ちょーつと一之瀬君と話してくるね？」

「お姉ちゃんあ、あたしがっ！！あたしが話すからあ！！！！！／／」

ここでお姉ちゃんに聞かれてしまったら、あたしは多分、恥ずかしくて死ねる。

で…話したんだけど…

「ちょっと一之瀬殺ってくるね」

「お姉ちゃんっ！！！！（汗）」

逆効果でした。

「脳内ハワイアン男ーっ！！！！！！出て来ないとぶっ殺す！！」

「どっちも死亡フラグな気がするっ！！お姉ちゃん！！そんな事よりキャラを保って！？」

「さっきから何を騒いでるんだ？」

「風丸君！！実は一之「ひゃあああっ！！駄目だよお姉ちゃん！！！！（泣）」綾がキ「あああああああ！！！！！！」なの！！」

「（綾が必死だなあ…）大体分かった。取り敢えず一之瀬を殺ればいいんだな？」

危険人物が増えました。

一之瀬さん…あたしはあなたが全力で逃げ切る事を祈っています…。
(遠目)

* * * * *

それから数日たったある日、あたしは一之瀬さんに校舎裏に呼び出されていた。勿論、話すのはこの前の事で、沈黙が続く中、一之瀬さんがそつと口を開いた。

「綾、この前は…ごめん…。」

「っ！だ、大丈夫…です…よ…？」

「……」

「……」

沈黙が痛い(泣)

「綾、一つ聞きたいんだけど。」

「はい。」

「何である時、嫌がらなかったの？」

「……私も…よく分からない…です…。」

最後らへんは聞き取れるか聞き取れないかの小さな声。
それに一之瀬さんは”そつか…”と苦笑していた。

「でも、嫌とは…感じませんでした…。」

”思考が麻痺してたと言うか…。”

付け足してそう言えば、驚いたような一之瀬さんがいて、何だか恥ずかしくて俯いた。

「綾、俺…自惚れても良い？」

「…えと…少し…なら…？」

あたしが一之瀬さんに引かれ始めてるのは…確かだから…。

俯きながらもそう言っと一之瀬さんが何も反応しないので不安になりゆっくりに顔を上げた。瞬間、一之瀬さんに抱きしめられてるあたしがいて…。

「綾！！俺綾大好き！！愛してる！！」

「あ、愛っ！！？／／／」

顔を真っ赤にして、あたしは金魚の様に口をパクパクさせた。

抱き締めている一之瀬さんからは見えないけれど、多分、間抜け面だと思う。

「よし！！デートしようか」

「……………え…………？」

「明日学校も部活も休みだし、ね？」

「え…えっ?!ええっ!!!!!!//」

「明日10時に迎えに行くね!!」

「えっ?!あっ!!!!!!」

勝手に話を進めていた彼、一之瀬さんはにこにこ嬉しそうに笑っている。

…断れないよ…そんな顔されたら…。
あたしが頷くのは数秒後…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9439/>

君と僕の方程式

2010年10月8日12時17分発行